第2弾

本屋大賞6作品+番外編 読んでみました。

皆さま、明けましておめでとうございます。新春、1回目の特集では読書のススメ♪慌ただしく過ごした年末年始から、今はほっと一息。のんびりと本を開いてみませんか☆本選びに困ったら、まずは本屋さんが選んだこちらをどうぞ!

前回の本屋大賞特集も、合わせてお楽しみください。

Column

活字離れが叫ばれてから、もうかなりの年数が経つ。でも、読んだ内容を頭で空想し心で感じ、疑似体験ができる事は、想像力が豊かになり集中力も高まる。ささやかな現実逃避ができる事でストレス解消にもなる!良いことづくめではないか!その上、語彙力の向上、ボケ防止になるとくれば、もう読まないわけにはいかない!スマホゲームやSNSも良いが、やっぱり読書が一番心落ち着かせる一策だと思うのだがいかがだろう。

第1弾はこちらのQRからご覧下さい!

読者プレゼント

抽選で5名様に1,000円分の図書カードプレゼント!

詳しくはプレゼント枠をみてネッと♪

2016年大賞作品

羊と鋼の森

宮下 奈都 著 文藝春秋

このタイトルはどういう意味かと、読む前はピンとこなかったのだが…。

1人の少年が高校生の時、学校にやってきた調律師との出会いをきっかけに、自分も同じく調律師を目指し、様々な思いを抱えながら成長していく過程を描いている。調律師になった青年は考える。理想の音とは?その音がどんな色の音か、演奏者が、聴衆が心地よい音とは?そして、生きていく中での目的を見つけた時の煌き、諦めると決めた時の挫折感など、その様子は淡々と、穏やかだ。

あっという間にページを繰るというよりは、読んでいるうちに心に落ち着きを取り戻せるよう。繊細な主人公、そして著者もまた繊細な人間なのだろうと想像できる。調律師という職業に熱い志を持ちながら、その想いを静かに表現しています。

2017年大賞作品

蜜蜂と遠雷

恩田 陸 著 幻冬舎

2005年受賞の「夜のピクニック」では若者の心情をとても瑞々しく描かれていた。今回はピアノコンクールをテーマにした作品である。緊張感や臨場感、そして嫉妬心やライバル心などが、どう表現されるのかと期待しながらページを繰り、読み進めました。

流石は恩田陸。もしかしてコンクールにエントリー経験があるのかと思うほどの表現力。読んでいる自分も観客の1人になったように、目の前の舞台に演奏者がいるかのように、心の中で「頑張れ。ミスしないで。」と念じる。頭の中が緊張感でキュッと熱を持つ。小説を読んで音楽に浸れます。読了後。さて、とYouTubeを開き、本の中で聴いた曲を実際に耳で確かめたい。そんな気持ちになる。直木賞とのダブル受賞作品。

2018年大賞作品

かがみの孤城

辻村 深月 著 ポプラ社

学校に通う世代の「生きにくさ」のような事を描いていくのだろうか。

ストーリーへの予備知識は全くゼロで読み始めた。そうすると、序盤で「これはファンタジーなのか」と意表を突かれる。登場人物たちの、特に主人公の心の動きは稚拙な表現だなと感じながら読んだが、これは中学生の少年少女たちの物語だから?わざとそうしているのだろうか。ただ、テーマは「不登校」。重たいのだ。中高生が読むと、印象は変わるだろうか。

長編ということもあり、中盤で中だるみを感じながらも、なんとか読了。あまり良いことを言っていないが、最後の謎解きと、「そうだったのか」と思う部分は、悪くない。だから読み始めて、途中で挫けそうになっても、最後まで読んで下さい。

2019年大賞作品

そして、バトンは渡された

瀬尾 まいこ 著 文藝春秋

物語は17歳の少女の言葉で淡々と紡がれていく。多感な時期に4度も姓が変わったが、彼女はいつも愛され、幸せだと言う。節目のたびに「覚悟」や現実を受け入れざるを得ない「諦め」があったはずだが、本の中ではさらりとかわす。「そんな簡単ではないはずだ」と感じながら読み進め、登場する「親」たちに偽善的なものを感じるのは、私がへそ曲がりだからだろうか。そして1つの疑問を感じながら読み、それが終盤で明らかになる。22歳に成長した「娘」は、その事実をいとも簡単に、冷静に受け止める。周りの親たちも幸せそう。

多くの読者は「その程度!?」と感じそうなのだが…。テーマが重たいのに軽いタッチで描いたという印象。読み手によって評価が分かれそう。

2015年2位作品

サラバ!

西 加奈子 著 小学館

この作品を読むきっかけは、著者と又吉直樹の対談で、又吉が絶賛していた事に始まった。直木賞受賞作でもあり、その魅力を確かめたくなった訳だ。

上巻。主人公の「僕」が幼少期の出来事を語り、その幼い日常を読まされている事に少々退屈を感じる。中巻になると青年期。「僕」は何もかもが上手くいく。しかし、下巻に入ると雰囲気がガラリと変わる。

優しい父、自己中心的な母、そして奇矯な振る舞いを繰り返す姉。ばらばらになる家族。自分は?アイツは「僕」より下のはず…それなのに。嫉妬する。自己嫌悪に陥る。

でも、そのままでは終わらない。何を信じるのか。どう生きるのか。少々哲学的な印象。人物の心の内を読み取れる言葉の表現力が良いなと、そう思いました。

2016年8位作品

ひとつむぎの手

知念 実希人 著 新潮社

舞台は大学病院の心臓外科。過酷な労働環境の心臓外科医と、要領の良い後輩医師、教授との関係。そこへやって来る研修医。盛りだくさんの内容ながら、最後は上手くまとまっていく。

大学病院の権力争いのようなドロドロとした医療系なのか?と思ったが、主人公は患者を想い、研修医のことを思いやる、不器用な医師。お人好しなのだ。この主人公だからこそのハッピーエンド。心温まるハートフルなストーリーと言えるだろう。温かい気持ちになるようなラストを迎えるが、少し物足りなさも感じる。

山崎豊子の「白い巨塔」、渡辺淳一の「雲の階段」などがお好きな方には、もう少しハラハラドキドキが欲しいところだろうと思う。だが、読みやすい文章で一気に読めます。